

方剂名	効能	生薬組成
書籍	主治および証	病機 方意

和解剤 調和肝脾剤 1

<p>しゃくやくかんぞうとう 芍薬甘草湯</p>	<p>柔肝解痙・緩急止痛 (抑木培土)</p>	<p>白芍 12g・炙甘草 12g 水煎し服用する。</p>
<p>傷寒論</p>	<p>&lt;主治&gt; 肝陰不足、肝気乗脾 腹中のけいれん痛、四肢の筋肉のひきつりなどを呈す。</p> <p>&lt;病機&gt; 肝の陰血不足で、肝気を抑制できず筋脈を濡養できないために、けいれんが生じる状態である。 肝気が脾虚に乗じて横逆し、脾気を阻滯すると腹痛が発生し、陰血が筋脈を濡養できず肝気が横竄すると筋肉のけいれんが生じる。</p> <p>&lt;方意&gt; 本方 (芍薬甘草湯) は柔肝の基本方である。柔肝とは、肝の陰血を補充することにより肝気を抑制して柔和にし、正常に疏泄が行えるようにすることである。 酸、微寒の白芍と、甘、微温の炙甘草は、酸甘化陰により肝、脾の陰を補充する。白芍は肝血を補い、肝陰を収斂し、柔肝、平肝、緩急止痙する。炙甘草は益脾生津し、緩急止痛、止痙する。両薬を配合することにより、滋陰平肝、緩急止痛、止痙の効果が強まり、肝の陰血を滋補して肝気を鎮め、脾の気陰を補って肝気の侵害を受けないように防止することができる (これが「抑木培土」である)。 なお、潤燥養筋、緩急止痙の効能により肝不養筋のけいれんにも有効である。</p> <p>&lt;参考&gt; 本方 (芍薬甘草湯) はけいれん性疼痛に有効であり、身体のどの部分であっても拘攣急迫するものを治す。 日本での保険適応効能、効果 急激に起こる筋肉のけいれんを伴う疼痛</p>	
<p>しゃくやくかんぞうぶしとう 芍薬甘草附子湯</p>	<p>扶陽益陰</p>	<p>半夏瀉心湯の乾姜を3gに減じ + 生姜3g 水煎し服用する。 (芍薬甘草湯の組成 + 附子) に相当する。</p>
<p>(傷寒論)</p>	<p>発汗すると表証が緩解して悪寒が消失するはずであるが、かえって悪寒が強くなるのは、発汗過多で衛陽が損傷したことを示す。汗が多いと、衛陽だけでなく営陰も損傷するので、四肢のひきつりも発生する。 附子で衛陽を補い、芍薬甘草湯で営陰を補充する。 日本での保険適応効能、効果 冷症で関節や筋肉の痛み、麻痺感があって四肢の屈伸が困難なもの次の諸症；慢性神経痛、慢性関節炎、関節リウマチ、筋肉リウマチ、五十肩、肩こり</p>	